

氏 名：志賀 加奈子

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：甲 第1号

学位授与年月日：平成31年3月13日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論文題目：小児科がない医療施設で子どもの予防接種を担う外来看護師の実
践力向上のためのアクションリサーチ

論文審査員：主査 山田 聡子

副査 河口 てる子 （主研究指導教員）

副査 百田 武司 （第1副研究指導教員）

副査 西片 久美子

副査 本田 多美枝

論文内容の要旨

【研究の背景】

世界的な予防接種の推進に大きく後れをとった日本は、近年、急速にワクチンの種類を増やしてきた。そのため、国内における子どもの予防接種は、急激に複雑化・高度化した。一方、小児医療は縮小しつつあり(江原,2015ab)、小児医療を専門としない医師や看護師も子どもの予防接種を担って小児保健に貢献している。しかし、通常は成人や高齢者を対象に実践している外来看護師は、子どもの予防接種を担うことで、いくつもの困難さを抱えながら現場を守っている状況にあることから、支援の必要性は大きいと言える(志賀, 河口,2018)。外来看護師の困難さが解決されることは、予防接種を受ける子どもと家族に対する看護実践の質の向上も期待できると考えられる。

【研究目的】

本研究は、小児科のない医療施設で子どもの予防接種を担う外来看護師の実践力の向上を目的とするアクションリサーチである。

【研究方法】

本研究は、Morton -Cooper (2000/2005) を参考とするアクションリサーチとした。予備調査をもとにアクションプランを構築した後に本研究を行った。データは、参加観察、半構造化面接、文書収集によって収集し、領域分析(Spradley,1979,1980/2010)を行った。データ収集を続けながら、参加者別に経過を追って実践力の向上に関わる発言や行動を抽出し

てマトリックスを作成した。その後、変化が見られた実践毎に経時的に整理した。本研究は日本赤十字北海道看護大学の研究倫理委員会（承認番号 29-283）及び看護学研究科共同看護学専攻研究倫理委員会(承認番号 17-01)の承認を得て行った。

【結果】

本研究の研究参加者は合計 14 名であった。このうち外来看護師 9 名を主要な研究参加者とし、看護助手 1 名、事務職 1 名、医師 2 名、薬剤師 1 名を補助的な研究参加者とした。外来看護師は、全員が既婚かつ子どもを持つ女性で、平均年齢は 38 歳、臨床経験 10 年以上のベテランばかりであった。データ収集期間は 2017 年 11 月から 2018 年 8 月であった。

A. アクション前の実践状況

1. 子どもの予防接種に神経をすり減らす

B 病院の外来看護師は、子どもの予防接種に対して、複雑なので誤接種事故が怖い、子どもにケガをさせそうで怖い、親が同席するのでプレッシャーがかかる、早く終わらせないといけないと考えており、事故が発生する危険性の多さ等に神経をすり減らしていた。

2. 子どもの安全確保に悪戦苦闘する

外来看護師は、子どもの安全を確保することに悪戦苦闘していた。接種者になった看護師は、誤接種防止事項を丁寧かつ慎重に尋ねていたが、固定者が早々としかもがっかりと子どもを固定してしまうことがあった。子どもは振り払おうと手足をさらに激しく動かすため、スタッフは安全を守るためにさらに強く押さえなくてはならなくなっていた。

3. 大人の患者への対応に追われる

外来看護師は、大人の患者への対応に追われて、子どもの予防接種について共有することがほとんどなかった。B 病院では、看護業務の手順書は用意されていたが、子どもの予防接種にはなかった。スタッフ間で話題になることもないため、看護師によって実践内容はまちまちで、大人の患者への対応に追われて、責任の所在が不明瞭になることもあった。

4. 親子へ援助を繰り出す余裕はない

外来看護師は、接種者が誤接種防止事項の確認を済ませ、大急ぎで母親へ固定法を指示して皮下注射等を済ませると「母子手帳を（事務職員が）お返しするので待合室でお待ち下さい」と声をかけることで精一杯だった。フォーマルインタビューでも親子への支援について外来看護師が語ることは少なく、親子への働きかけに関心を向ける余裕はなかった。

B. 主なアクションの実施内容

研究者は、現場の状況に合わせてアクションプランを修正しながら実施した。スタッフ一人一人へ働きかけて、ニーズ把握、関係構築を図り、スタッフが自信を持って実践し、仲間と課題を共有したり、解決策を試みたり出来るように支援を続けた。概ね週に 1 回の

ペースで継続的に予防接種に立ち会い、実践モデルを提示したり、スタッフの質問に応答したりすることを通算 40 回行った。また、教材を提供したり、動画等の情報源を紹介したりした。学習会はスタッフの希望に基づいてテーマを決め合計 5 回行った。その後、事例検討会へ切り替え、スタッフが事例提供者となって困難事例について検討し、ロタワクチン経口接種の手順案を作成した。

C. 外来看護師の変化

1. 子どもの安全を守る実践力の向上

外来看護師には、固定法、皮下注射法、管針法、経口接種法、接種後の院内待機による観察法というスキルに向上があった。固定法の学習会を開催すると、連絡帳を通して実践してみた結果のレスポンスがあり、研究者へ実践モデルの提示等を希望する看護師も現れ、スタッフは固定法の工夫に意識を向け、個々の親子に合わせて方法を変えるようになっていった。子どもを固定する時間も短くなり、子どもの啼泣や体動が減って安全性が増した。また、研究者は、子どもの皮下注射法について 10 分間に圧縮した学習会を開催した。参加したスタッフは、大人とは違う方法に驚いていたが、解説に納得して練習に取り組み実践に移していた。外来看護師の皮下注射技術の向上によって、子どもが痛みを感じる時間も短くなり、激しく動くことがさらに減少して安全性が益々増した。

2. 親子の負担を緩和する実践力の向上

外来看護師には、子どもの痛みや恐怖などの苦痛の緩和を図り、母親の焦りや不安の緩和を図るという 2 つのスキルに向上があった。研究者が子どもへの言葉かけやディストラクションの実践モデルを提示すると、スタッフは自分の工夫を加えて実践しており、子どもが泣かずに皮下注射が終わると父母にとっても喜ばれていた。また、学習会で母親の知りたいことや望みも紹介すると、B 病院を訪れる母親がどれくらい分かっているのか、誰がどこで説明しているのか、などと次々にスタッフから疑問が出された。さらに、スタッフは母親へ働きかけ始め、母親としての経験を活用しながら、来院する母親を労ったり、心配なことを尋ねて引き出そうとしたりするなど、母親の負担を緩和する実践力は向上した。

3. 仲間と改善策を生み出す実践力の向上

外来看護師は、子どもの予防接種について得た情報を仲間と共有したり、疑問を話題にして共有したり、改善案を提案したり、その改善案と一緒に試みる状況が増えた。子どもの予防接種の場合は、設置されている大型廃棄ボックスが使いづらく、スタッフはやりにくそうに行ったり来たりしていた。ある日、H さんが小型の針捨てボックスの設置を提案した。E さんは、その提案に賛成して使ってみるようになった。接種者が移動する動線が短くなり、未使用シリンジと間違える危険性もなくなり、安全性も増していた。一緒に試

みたEさんが「やりやすい！これはいいわね」と評価すると、提案したHさんは満足そうな笑顔だった。外来看護師の仲間と改善策を生み出す実践力は向上した。

【考察】

A. 小児科がない医療施設の外来看護師が小児看護実践力を習得する際の特徴

小児科がない医療施設の外来看護師は、専門性が異なるため、身近に実践を示してくれるロールモデルがいなかったり、専門的知識や最新情報を入手できる情報源が得にくかったりすることで、小児看護の実践力を習得するハードルは高かった。また、10年以上の臨床経験を持つベテランであることで、実際にインシデントやアクシデントを身近に経験したこともあるため、子どもの予防接種において、誤接種事故を起こすこと、子どもにケガを負わせること等に強い恐れを持っており、大きなプレッシャーとなっていた。

B. 小児看護実践力向上の要因

本研究はアクションリサーチであったため、現場のニーズを把握した上で支援を実施できること、さらに支援を実施しながら現場のニーズをさらに掘り起こしたり、柔軟に支援内容を修正して急なニーズに合わせて実施したりすることも可能であった。その結果、研究者の支援を現場のニーズと一致させることができた。また、本研究が情報や支援を必要とする方々のところへ研究者が訪れるというアウトリーチ型でもあったことで、始めから現場に即して行われるため、スタッフが習得したスキルを自分たちの現場に即した形に変換する時間や労力を省くことができた。さらに、予防接種外来へ研究者が立ち会うという方法であったことで、親子とスタッフの困難を直接かつ速やかに把握することができ、そしてタイムリーに解決を促すことが可能であった。このような方法論的要因があったことで、外来看護師の小児看護実践力の向上が可能になったと考えられる。

また、本研究の研究参加者はベテランの外来看護師ばかりで、母親としての経験も持っており、子育て中である看護師がほとんどだった。長い臨床経験の中で看護実践の土台が形成されているため、内容を理解してすぐに実践に取り込むことができたり、母親としての経験から、育児に悩む母親達の気持ちを推測して言葉をかけたり、母親としての経験談を示したりしながら、母親へ働きかけることができたと考えられる。さらに、本研究は、研究者が小児看護を専門としているだけでなく、30年以上の経験を持っておりかつ教員でもあった。このような背景は、ベテランである外来看護師に受け入れてもらいやすかったと考えられる。これらの人的要因があったことも、本研究において外来看護師の小児看護実践力が向上した要因として考えられる。

論文審査の結果の要旨

本研究は小児医療の縮小が進む中で、小児医療を専門としていないにも関わらず乳幼児の予防接種を担わざるをえない外来看護師たちの困難に着目し、予防接種を受ける子どもと家族に対する看護実践の質を向上させる方法を探求した意欲的な取り組みである。フィールドワークにより小児の予防接種をとりまく現状を把握し、外来看護師の実践力向上を支援する必要性を確認したうえで研究が実施された。

アクションリサーチを研究方法として採用し、研究者が継続的にフィールドに出向き研究参加者との関係性を丁寧に構築しながら外来看護師のニーズを見極め、アクションプランを適宜修正したことで外来看護師が明らかに変化し実践力が向上するという成果が得られていることが評価された。また、分析結果から、5つのスキルに関する10分間の学習会や実践モデルの提示をアウトリーチ型で提供することを有効なアクションとして具体的に示すことができおり、類似状況への転用可能性が示唆された。

さらに、本研究成果に基づき、小児科がない医療施設で子どもの予防接種が行われることを想定した研修を用意すること等の政策提言がなされている。これらは、日本における予防接種政策にとって現実に即した必要な内容が示されており、この点も非常に重要な知見であると評価した。

以上、適切かつ妥当な研究方法により明確な成果が得られており、その内容は看護学の研究として独自性があり、社会的な意義があると評価した。

よって、本論文は、博士（看護学）の学位論文として価値あるものと認め、また、論文内容、およびそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。